

知求会ニュース

2012年12月

第44号

◎ 学位授与おめでとうございます！

知求会の調査で把握した情報をお伝えします。

陳 激(CHEN, Ji) 国際学研究科第1期生

- ① 博士(社会学) 一橋大学
- ② 2008(平成20)年11月26日 (博)第xxxx号
- ③ 「日中民間漁業協定の歴史的意義」
- ④ 東北公益文化大学大学院講師(2011年9月から特任講師を経て)

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)(東北大学)・博士(文学)(名古屋大学) / (筑波大学) / (東北大学) 3名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)・博士(人文学)(パリ東大学)・博士(芸術学)(筑波大学)・博士(農学)(東京農工大学連合大学院) 2名・博士(国際学)(宇都宮大学) 2名・博士(経済学)(名古屋市立大学)・博士(観光経営学)(慶熙大学校)・博士(人間・環境学)(京都大学)の計14名です。

◎ 訃報

宇都宮在住であった国際社会研究専攻第5期生の**柚木慶生**さんが本年6月12日に病気でご逝去されました。定年退職後、国際学部に入學そして、国際学研究科に進學され、中国について研究されていました。貴重な経験をぜひ、知求会ニュースに寄稿していただこうとした矢先の訃報でした。大変残念です。享年73歳でした。ご冥福をお祈りします。

◎ 着任教職員紹介17

前之園 望 (MAENOSONO Nozomu)

専門：表象文化論、芸術文化論

前職：日本学術振興会特別研究員 PD

趣味：読書、音楽鑑賞、美術鑑賞、蚤の市めぐり

自己紹介：

出産・育児休暇中の大野斉子先生の代替教員として、平成24年度後期より一年間、表象文化論等の授業を担当しています。私の専門は、シュルレアリスムを中心とするフランスの20世紀文学・芸術学研究です。シュルレアリスムは20世紀最大の芸術運動で、主に1930年代から40年代にかけて、フランスを中心に世界中に広がりました。万人に満場一致で歓迎されたわけではありませんが、国境を越えて人々の共感を誘うなにか普遍的な要素が、シュルレアリスムには含まれていたということでしょう。

私たちは知らないうちに、文化的・社会的慣習によって思考や行動を制限されています。そうした制度的なものに抵抗し、世界を変える——新しい世界を「今・ここ」に出現させる——糸口として、シュルレアリスムは「偶然」という現象に非常に強い関心を寄せていました。私との偶然の出会いを契機に、学生のみなさんがそれぞれ新しい世界を発見できるよう、日々試行錯誤しています。

◎ 教職員人事異動

米川 正子 特任准教授

国際社会交流研究講座の米川先生が、7月末日付で退職されました。宇都宮大学には2009年11月から2年9ヶ月在籍されました。

* 『HANDS next—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007年9月20日に、ニューズレター『HANDS』第1号が発行されました。2010年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第11号(2012年11月21日)

多言語による高校進学ガイダンス報告

国際学部教授 HANDS プロジェクト研究代表 田巻松雄

平成24年度第2回外国人児童生徒・グローバル教育推進協議会報告

田巻松雄

シリーズたぶんか共生

すべての子どもたちに学ぶ喜びを

国際学部4年 本望 茜・菅原里沙

第2回外国人児童生徒支援会議報告

国際学部 特任准教授 若林秀樹

進め日本語教室第3回

今日も元気いっぱい活動中です！

佐野市立城東中学校教諭 塚田尚美

国際キャリア開発プログラム参加報告

スリランカを訪ねて

国際学部1年 六川彩水

Think Globally, Act Locally

国際学部1年 鈴木忠男

シリーズ；学生ボランティア派遣体験記8

自分自身の成長に

教育学研究科 カリキュラム開発専攻2年 赤羽かずみ

「学び合う姿勢」の大切さ

教育学部国語教育 4年 加藤千明

外国人児童生徒の未来を考え

国際学研究科国際交流専攻 1年 鄭文

事務局便り

・HANDS プロジェクトからのお知らせ

「外国につながる子どもフォーラム 2012」開催

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞 朝刊 (平成 23 年 9 月 9 日発行) 14 面に、「私の下野新聞批評」コーナーで、「多重苦にあえぐ県内農業」の内容でまちびあセンター長・安藤正知さん(国際社会研究専攻・4 期生)の記事が掲載されました。

2. 下野新聞 朝刊 (平成 23 年 10 月 14 日発行) 13 面に、「私の下野新聞批評」コーナーで、「処分場問題、継続報道を」の内容でまちびあセンター長・安藤正知さん(国際社会研究専攻・4 期生)の記事が掲載されました。

3. 下野新聞 朝刊 (平成 23 年 11 月 19 日発行) 13 面に、「私の下野新聞批評」コーナーで、「知事選と地方紙の役割」の内容でまちびあセンター長・安藤正知さん(国際社会研究専攻・4 期生)の記事が掲載されました。

4. UU now29 号 (平成 23 年 11 月 20 日発行) 8 面に、「Welcome to `授業」コーナーで、基盤教育 教養科目「3・11 と学問の不確かさ」と題して、国際学部社会科学 清水奈名子先生が紹介されました。

(http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu29/8_9.pdf)

5. UU now29 号 (平成 23 年 11 月 20 日発行) 9 面に、「Welcome to 研究室&ゼミ」コーナーで、「松金ゼミ」と題して、国際学部文化学科 松金公正先生が紹介されました。

(http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu29/8_9.pdf)

6. 下野新聞朝刊 (平成 23 年 7 月 17 日発行) 2 面に、「PKO 協力法 20 年 自衛隊派遣で宇大・清水准教授」と題して、「国際貢献問い直す時期」「武器使用 国民的議論を」の内容で清水奈名子先生の記事が掲載されました。

研究室訪問 36 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 36 回には国際文化交流研究講座所属のライマン アンドリュウ先生にお願いしました。

「教育指針の概要と研究利益」

ライマン アンドリュウ

以下の記述は主に研究利益と教育目的において、私の教育者としての経験を述べたものです。私自身の教育指針は、調査・問題・経験をベースとした学習によって学生個々の探

究心を促すことです。これは学生の自主性や好奇心により意識を促すことに重点をおいた、私自身の研究に反映するものです。今日の学生は一般的な受動型学習から離れ、実践に携わった情報の習得と自発的に目的を認識する必要があります。今までの一般的な大きなクラス、教師は近づきたい存在、講義のプロセスは理論的で難しい傾向といったものから離れ、私のクラスでは生徒のパラダイム（実例）を重視したものになります。現代のクラスでは、生徒は知識を授かるといった立場だけではなく、自由に積極的に参加し、彼らの理にかなった領域を探し求めるべきであると思われる。

現在私は、異文化コミュニケーションと文化意識を基本とした教育方法を研究しています。このような研究は総体的に、具体的な状況が必要です。的確なスキルを得るには授業の中でのセッティングは難しいでしょう。しかしながら、応用民族学的手法の調査、研究で学生が彼らの一般常識や、慣れ親しんだ価値観に疑問を抱くという認識を与えることができます。個々の違いや新しいものを創造し、より広い概念と世界観を理解するためにまず、自分自身の源やアイデンティティを見つめることも必要不可欠です。

この研究はカナダ政府の援助により行われたもので、文化意識を高めるためのモデルとして、カナダの多文化社会を日本の学生に紹介したものです。過去に様々なレベルで生徒にとって最も意味のある手段や方法を提供し、彼らの興味や目標をより自主性のある学習法へと促すように試みました。非常に強く思うことは、教師は生徒自身の発見や学習、そして経験や新しいアイデアを共に反映させるためのガイドや助言、模範となるべきであることです。

私達の学部では年に1回“Intensive English Training Program”を企画し、多くの留学生を含んだ、おおよそ100名の学生と6名の教師が数日間合宿をします。生徒と教師が衣食住そして、学習を共同で行うことはお互いを理解し合い、言語・文化意識を集中させる最適な機会となります。この関係は通常の授業にまで発展し、相互理解、信頼など通常の授業では培われにくい意識を働かせる原動力となります。

現代では、交通、経済、情報交換は実に国際的で相互文化意識は全ての人に関わり、重要なものです。もはや誰もが、外国語もしくは他国の人々と触れ合う機会が無いという状況があり得なくなっています。他の文化に触れ合い学ぶ機会のない場合、常に近づき続ける国際社会に向き合う時に、不利な状況になることでしょう。学生達がこれからの将来に直面する世界において、教師達は模範となり、思慮・忍耐・尊重・危機意識・知識への追求を兼ね備えられるように導くことが必要です。これらのスキルは学生が国際人として世の中に出る時に成功するため、必要不可欠な要素であるはずで

(2012年12月5日原稿受理)

博士録 17 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第17回目には **岡本義輝**さんをお願いしました。

「博士後期課程を修了して」

岡本 義輝 (国博第4号)

国際学研究科博士後期課程を2012年3月に修了した。そこで、博士論文の概要を述べ、小生にとって大きな課題であった査読付き論文、先行研究調査、学会発表、論文のまとめ、について報告する。

1 博士論文の概要

1) テーマ 「製品開発の国際移転～マレーシアの日系企業における実証的研究～」

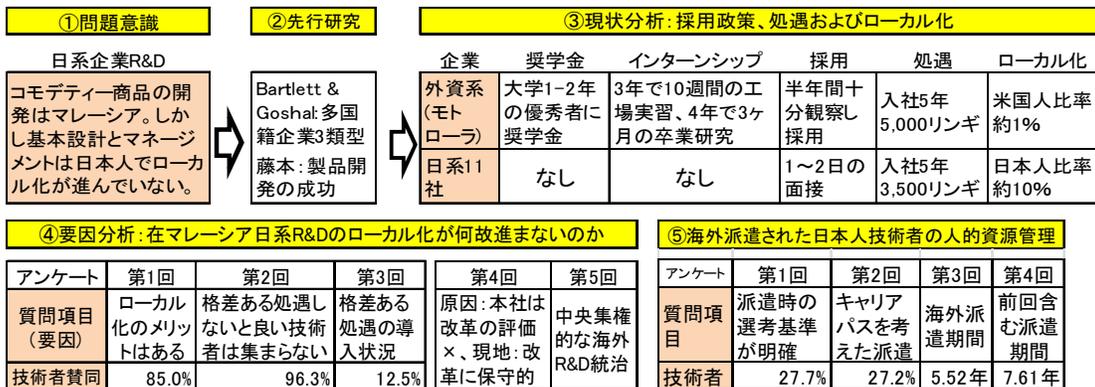
2) 博論要旨

(1) 問題意識 ①

全世界の工場で生産するコモディティ商品の製品開発はその大半をマレーシアに移管した。しかし R&D (Research & Development:本稿では製品開発のこと) 部門では約 10% の日本人が基本設計と管理を行っており、ローカル化が進んでいない。

(2) 分析枠組みと調査結果

②～③を述べた後、④と⑤の要因をアンケートにもとづき分析する



(3) 先行研究 ②

本稿は、Bartlett & Goshal (1989) の多国籍企業3類型をベースに「第2極開発センター」を提案している。また藤本(2004)「成功する製品開発」に依拠し、マレーシアでの「R&Dが成功する」と「R&Dの海外移転が成功する」の違いを論述する。

4) 現状分析: 外資系・日系 R&D の採用政策と処遇の違いとローカル化 ③

日系と外資系の R&D 技術者の「採用政策」(優秀な学生に奨学金を与え、彼らを長期間観察して採用する。日系は1~2日の面接のみ)と「処遇」(外資系の給与が1.5倍位高い)に大きな違いがあり、日系 R&D が優秀な技術者を採用できていない。

5) 要因分析: 日系 R&D が上記 4) を何故、改革しないのか (5回のアンケート調査) ④

第1回「ローカル化のメリットあり」、第2回「格差ある賃金を導入しないと優秀な技術者は採用出来ない?」の質問にほぼ同意している。しかし第3回「格差ある処遇の導入状況」に肯定的な回答は12.5%で、「総論賛成、各論実行せず」となった。第4回「その原因」では、①本社は R&D の改革を評価しない、②現地法人社長は保守的で改革をしない、であ

る。第5回「その原因：国際経営戦略の視点から」は中央集権的な海外 R&D 統治に要因があった。

6) 海外派遣された日本人技術者の人的資源管理 ⑤

アンケートの結果、技術者は、①派遣時の選考基準が不明確、②キャリアパスを考えていない派遣である、と回答している。また③回答者の平均派遣期間は5.5年と長い。この①～③とも今後の改善が必要である。

2 博士論文作成の課題と反省

1) 査読付き論文

一般的に、全国大会で発表すると査読付の学会誌に投稿の権利が生まれる。小生はアジア経営学会の学会誌「アジア経営研究」に2009年3月末に最終稿を提出し、2009年6月30日発行の「アジア経営研究 No.15 2009」に掲載された。引き続いて、アジア経済研究所の「アジア経済」、国際ビジネス研究学会の「国際ビジネス研究」への投稿を計画し、前者の査読は受けた。しかしその厳しい指摘で挫折した。本来、3誌ぐらいの査読付き論文の合格がベターだと言える。くじけず、初志貫徹すべきだったと反省している。

2) 先行研究調査

修論指導の藤田 和子 先生、博論指導の磯谷 玲 先生から先行研究の重要性を何度も説明を受けた。しかし、製品開発 R&D の論文を「Harvard Business Review」等で調べるも見つからなかったため製品開発の分野での論文はないと思い込んでいた。そこで、当たり前のことであるが、上記(3) 先行研究に述べたような切り口となった。

また、博論の参考文献で原本が海外にある場合、英文文献を掲載する必要があるのも常識である。この件も終盤で苦労した。

3) 学会入会と学会での発表

経営学の研究会や全国大会での発表のスタイルは、はじめに、研究の背景、から始まって、先行研究、研究の枠組み、ケーススタディー、論点のまとめ、インプリケーション、に至るまで一定のパターンがある。また、先生方や院生の良い発表は内容に説得力があり、博論の作成に向けて大変勉強になる。小生も修士の時に学会に入れば良かったと反省している。修士に在学中で博士後期課程に進学の意味のある人は、修士時代から2つ位の学会に加入されることをお勧めする。

小生は6つの学会に加入した。そして、この5年間で10の研究会、8つの全国大会で発表した。発表時の厳しい質疑とその応答や終了後の指導で随分鍛えられたと考える。

4) 論文のまとめ、

論文の作成に当たって修士時代も含め、約40回マレーシアを訪問した。アンケートやインタビューを行った企業は延べ約1,500社、面談した人は延べ約2,000人である。その多さの割に論文に盛り込んでいるデータが少ない。その結果として博士論文の総ページ数が、143頁と少なかった点は大いに反省すべきである。

また、章立てが、「はじめに」、「1～7章」、「むすび」、「参考文献」の構成になっている。しかし、各章のバランスが良くない。具体的には、①2章：2ページ、②3章：5ページ、③6章：43ページである。前半は理論、後半はデータと分離することで章バランスを取る等、改善の余地があったと考える。

(2012年11月28日原稿受理)

知究人 21 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第44号の第21回目は、東京大学大学院修士課程に進学された高橋優研究室OGの**田巻綾那**さんをお願いしました。

「入院生活謳歌中」

東京大学大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻
社会学分野修士課程1年 **田巻 綾那**

大学院入学後3日目。先輩方に新入生歓迎会を開いてもらった時の先輩の一言。

「新入生のみなさん、「入院」おめでとう！今日がこれから始まる大学院生活の中で一番楽しい日です。それでは今日は精一杯楽しんでいってください！」

これを聞いた時はやや不安に思いましたが、入学してまもなく修士1年が終わる現在、やはり大学院に進んで良かったと心から感じています。今日はそんな私の「入院生活」をご紹介しますので、ぜひ読んでほしいと思います。

宇都宮大学時代、大学院進学に至るまで

私は2007年に宇都宮大学国際学部国際社会学科に入学し、学部4年時に1年間休学してドイツのトリアー大学に留学しました。ヨーロッパ思想構造論ゼミに所属し、高橋優先生指導の下、「ドイツ企業の戦後責任と『過去の克服』—『記憶・責任・未来』基金の事例から—」という題目で卒業論文を執筆しました。現在は東京大学大学院人文社会系研究科に所属し、社会学を専攻しています。

このように書くと全てが上手くいっているような印象かもしれませんが、日本の大学院進学を決めたのは、なんと学部4年時の8月のこと。しかも進学志望は学部時代にほとんど触れたことのない社会学。限られた時間の中での院試対策と卒業論文執筆は予想以上に厳しいものでしたが、高橋先生を始めとする多くの先生方や友人、家族の助けを得てこの困難を乗り越えられたことは、自分にとってかけがえのない経験となっています。

東京大学大学院（社会学分野）紹介

私は人文社会系研究科の中の社会文化研究専攻、社会学分野に所属しています。そこでは個性とやる気に満ち溢れる大学院生と先生方によって、日々刺激的なゼミや研究会が繰り広げられています。このような人々と共に研究できるところが、東大社会学の一番の魅

力です。物事を全く別の視点から眺め、鋭い批判を行う能力に長けた人が非常に多く、私もそのような視点を持てるようになりたいと思っています。大学院から社会学を始めた私にとっては困難なことばかりですが、自分なりに日々精進しているつもりです。

もちろん社会学の授業だけではなく、他研究科の授業も受講可能です。社会学院生の中にも、自分の研究に関わる他研究科の授業に積極的に参加している姿が見られます。また、学生に対するサポートが手厚いのも、この大学院の魅力の一つです。私は今年 2012 年の夏に現地調査と資料収集を目的として 1 か月ほどドイツに滞在したのですが、そういった学生に対する助成金制度も数多くあります。

研究テーマ

ドイツにおいて第二次世界大戦の記憶がいかにして次世代へ伝承されていくのかという、『過去の克服』問題が私の研究テーマで、その中でも特に記憶と場所の関連性・結びつきに着目したいと考えています。このことから、戦時下に大量虐殺が行われたまさにその場所に建設され、その歴史的事象を記憶している強制収容所ミュージアムを事例として議論を展開していくことを検討中です。「過去にいかに向き合うか」という問いは、「どのような未来を生きるのか」という問いと同義であると思います。したがって、終戦から 70 年が経過しようとしている今もなお、過去に対する人々の姿勢や今後の展望について批判・検討していくことは不可欠であるというのが、私の根底にある問題意識です。

終わりに

大学院進学に興味を持たれているみなさん、「大学卒業後も勉強したい、研究したい」という気持ちを持っているのなら、その気持ちを抱いている今まさに、行動すべきです。チャンスはいつでも存在するものではありません。大学院進学の意味があり、チャンスもあるならぜひ自分の可能性を試してみてください。

(国際学部 国際社会学科 2011 年 3 月卒業生)

(2012 年 12 月 5 日原稿受理)

海外だより 15 第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外在住者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。田巻研究室 OG の川村祐加さんにお願しました。

「“世界一幸福な国” デンマークで」

川村 祐加

大学 4 年間、家庭教師としてアルバイトを続けました。その中で、学校に行きたくても行けない、学校が合わずに行けない子どもたちと出会いました。“通常のルール” から外れてしまった彼らが抱える問題は大きく、外部からのサポートはほとんどありません。卒業

研究では不登校児に焦点を当てて、日本の教育問題について取り扱いました。社会に出ても、不登校・引きこもり関連のシンポジウムに積極的に参加し、2年前には引きこもり学生の社会復帰のためにボランティアとしてかかわることができました。教育関連の雑誌編集者として働いていましたが、日本の教育現場ではさまざまな問題があり、生きづらさを感じている子どもが多くいることを実感し、情報発信の立場ではなく、いつか問題解決ができるようになりたいと思い退職を決めました。“世界で一番幸福な国”では、子どもたちはどう過ごしているのかを知りたいと思い、デンマークを留学先に選びました。

デンマークには「フォルケホイスコーレ（国民高等学校）」というシステムがあり、詰め込み型の教育を否定し、教師と生徒、生徒同士の対話によってお互いを向上させるという目的で運営されています。17歳半以上であれば誰でも入学でき（留学生は語学力が必要）、全寮制で、先生方も校内やその近辺で暮らしています。高校卒業後に何をしたらわからない人、大学を休学してきている人、社会に出てからまた学びたいと思って入学している人など、バックグラウンドはさまざまです。“競争”ではなく“共生”を重視しているため、在学中に試験はありません。その代わりにグループワーク・プレゼンテーション・ディベートなど、コミュニケーション中心の教育内容です。グループに分かれて、週末のパーティ運営をさせたり、イベントを計画させたり、多くが生徒主体で行われます。

ここにきて「デンマーク人は人生を楽しむ余裕があって、さらに他人を楽しませることが上手である」と感じました。デンマークの小中高校を訪問したときも同じような印象を受けました。その背景には、豊かな社会福祉制度なども関係していますが、やはり教育の影響は大きいと思います。日本の詰め込み型・テスト重視の教育で見逃されがちな人格形成が、デンマークでは大切にされています。不登校・引きこもりの大きな原因となるいじめや成績不振による挫折の解決になるヒントを探しながら日々、学んでいます。

今後はデンマークで学んだことを生かしながら、大学で心理学を学び直し、悩みや不安を持つ子どもたちと直接触れ合える仕事に就きたいと思っています。

（国際学部 国際社会学科 2000年3月卒業生）

（2012年12月2日原稿受理）

海外留学今昔 08 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、カナダに留学した小平加奈さんと熊之郷早紀さんをお願いしました。

「カナダでの挑戦」

「習うより 慣れる！」

私の留学生生活を一言で言い表すならばこの言葉がぴったりだろう。私は2010年の9月から2011年の4月まで、宇都宮大学の提携校であるカナダのノーザン・ブリティッシュ・コロンビア大学（以下 UNBC）に留学した。この8カ月はまさに「習うより 慣れる」、挑戦の連続であった。

「なんとかなるだろう」そう思っていた。出国前の英語力は乏しく、留学のための語学勉強もほとんどしてこなかった。しかし実際はそんな甘いものではなかった。

UNBC への留学は、単なる語学留学ではなく、名の通りの交換留学であったため、現地の学生に交じって講義を受講していた。英語がわかって当たり前の中で進められていく講義は、初めのうちは苦痛でしかなかった。ものすごいスピードで進んでいく教授の講義と生徒による質問・コメントバックなどのディスカッション、毎日の膨大なリーディングによる予習と復習等、本当につらかった。いくら耳を研ぎ澄ませて理解しようにも言葉が分からず、何をしても良いのかも分からない、そんなところからのスタートであった。授業後は毎回教授の所に行き質問をしたり、友達に分かりやすい英語で内容を説明してもらったり、グループスタディーを開いたりした。残りの時間は、朝から晩まで図書館に缶詰状態になりテキストとひたすら向き合った。そして2か月程が過ぎると教授の言うことが聞き取れ、授業内容が理解できてきた。分かったときの感動は今でも憶えている。やっと自分のやりたいことができる、スタート地点に立てた気がした時であった。

勉強以外にも色んなことに挑戦した。

日本語の学習パートナーを引き受けたり、週に1度の日本語の授業のTAをやったりもした。自分が普段何の意識もせずに使っている母国語を教えるのはそう容易いものではない。日本語の文法を英語で説明することほど難しいものはなかったが、日本語の奥深さ、楽しさにも気づけた活動であった。

そして、私の留学中「東日本大震災」が発生した。日本にいる家族や友達と連絡がとれず、どうしたら良いのか分からなかった。そんな時に大学の友達が自分のことのように心配してくれ、自分はここで何ができるのか、考えた結果が募金活動であった。カナダ人の友達に声をかけ、一緒に大学内で募金活動をした。街の新聞やテレビ、ラジオにも広報し、街全体に広がる活動となった。英語力に自信のなかった私だが、日本のみんなの原動力を受け、また友達の力を借りてこのような活動を起こすことができた。日本人のほとんどいないプリンス・ジョージで活動ができたことは、大きな自信にもつながった。

4月に留学が終わると、それから2カ月半一人旅をした。カナダ・アメリカ東部を北から南にかけて横断した。留学前は一人で2カ月半も旅行するなど考えつかないだろう。とにかく一人で挑戦してみたかった。もっとカナダにいたい。UNBCでの8カ月が私を成長させてくれたとはっきりと言える。

私の留学生生活は慣れる！の環境で、毎日が挑戦の連続であった。人生で一番勉強をし、

人生で一番友達や先生に助けられ、人生で一番自分と向き合い、日本について考え、人生で一番成長した一年間だった。この留学で得たことは計り知れないほど私の糧となった。私を支えてくれた友達、先生、すべての人に感謝したい。きっと何年かしたら私はあの場所で生活している、今はそんな気さえしている。

(国際学部 国際社会学科 4年在学生)

(2012年12月12日原稿受理)

「念願のカナダ」

熊之郷 早紀

海外への興味は小学生くらいの頃から始まったと思う。英会話教室に通っていて、英語を話すのが好きだった。大学在学中に海外へ行くことは密かな目標で、交換留学の申請を決意し、国を決める際に気付いたのがカナダへの強い興味であった。元々は、英会話教室の先生が10年程カナダに滞在していた頃の話聞いたことがきっかけであったと思うが、気付いたらとにかくカナダへ行きたいと思っていた。何か分からないが惹かれるものがあった。念願のカナダ。留学していた約1年間は、自分が想像していたよりもあっという間に過ぎた。

私が通ったのはブリティッシュコロンビア州プリンス・ジョージ市にあるUNBC大学。規模は宇都宮大学と同じくらいで、周りには自然があふれていて、野生の熊やムースが現れる。一言でいえば田舎である。想像していた通りのカナダ。自然が大好きな私は、友達と学校裏にある湖までハイキングをしたり、そこでキャンプファイヤーなど楽しんだ。カナダ人は本当にアウトドアが大好きだ。冬は、宇都宮と比べると尋常じゃないくらい寒いのに、薄着でどこへでも出かける。そんなところが好きだった。

一方授業では、留学生用の特別クラスも語学クラスもなく、カナダ到着後早々、ネイティブの学生と同じように授業を受けた。とにかく慣れるのに必死だった。エッセイの書き方もよく分からず、先生に何度も聞いた。友達にも聞いた。カナダ人はバックグラウンドの異なる人が多いからか、一人ひとり違う言語を持っている人と話すことに慣れている。英語がいまいちでも最後までゆっくり話を聞いてくれる。なんとか単位を一つも落とさず、授業を終えることが出来た。

遊びも勉強も充実していたが、留学していて最も楽しかったこと、それは友達を作ることである。単純なことであるが、もし自分がカナダへ来ていなかったら一生会えなかった人々と話し、時間を共にしていることに感動を覚えた。カナダ人以外にも他国からの留学生とも友達になり、世界に友達が出来た。今はもうバラバラになってしまっているが、お互いの人生の一部を一緒に過ごしたと思うと、カナダに居た1年が本当にかげがえのない時間であったと感じる。そんな感動も、日本に居たら決して感じられなかった。

私のカナダ留学は語学習得が主な目的ではなかった。ただ単純に、知っている人が誰もおらず、その土地のことは何も知らないような場所で、1人で生活してみたかった。ただの

興味である。その興味の中に留学という選択肢があり、さらにカナダへの興味があっただけで、それだけである。その単純さのおかげで、絶対にならないと思っていたホームシックにもなった。しかし、語学という 1 つの目的にとらわれず過ごすことで、いろいろな文化の違いなどを柔軟に受け入れることが出来たと思う。特にカナダは移民が多いこともあり、本当にいろいろなバックグラウンドの異なる人々がいて、カナダに居ながらも一気に多くの国の人々を見たようだ。それはカナダならではの特徴であり、魅力であると思う。日本という独自の言語を持ち、他国に祖先を持たない国では、それは決して経験できないことであり、貴重であった。結果的に語学も習得することが出来たが、英語がより話せるようになったことが特別だとは思わない。ただ、今後もそれをさまざまな国の人々とコミュニケーションをとるツールとして、さらに自分の知識を養っていきたいと思う。

(国際学部 国際社会学科 3 年在学生)

注：文中の UNBC 大学は、ノーザン・ブリティッシュ・コロンビア大学(University of northern british columbia)の略称です。

(2012 年 11 月 27 日原稿受理)

NEW

学生サロン 04 知求会ニュース第 41 号より現役学部生によるコーナーを設けました。

栃木県の外国につながる子どもたちの未来を考えて ～外国につながる子どもフォーラム 2012～

コハツ・ホセ

12 月 1 日(土)に宇都宮大学の施設内で宇都宮大学 HANDS プロジェクト主催の「外国につながる子どもフォーラム 2012」(以下、フォーラム)が開催されました。今年が 3 回目だったということですが、個人的には初めての協力と参加となりました。3 部構成であったフォーラムに関して、スタッフ側及び出席者という視点から栃木県の外国につながる子どもたちの未来について述べていきます。

フォーラムに参加をしてみず注目できたのが、出席者の方々でした。大学生、学校の先生はもちろんですが、一般の人たちもその多くを占めていました。おそらく宇都宮市内の地域住民だと思われる方々で、このテーマに於いて非常に関心が高まっている証拠ではないのかと感ずることができました。喜ばしいことだと思う反面、さらなる認知度及び理解を得るにはこれからどのように活動したらよいのかと考えてしまいました。

3 部構成の内容は、1 部の学生主体の討論会、2 部の学生ボランティア派遣の実情報告及び 3 部では「多言語による高校進学ガイダンス」に関する意見交換でした。このような 3 部構成の中で強く感じることができたのは、外国につながる子どもたちへの興味・関心が増加しているのではないのかということです。1 部の討論会では、実際に外国につながる 3 人の体験談を聞き、彼らが周囲から得てきた支援や理解は、従来はなかなか得ることが難しかったことではなかったと思います。また、2 部の各小中学校に派遣されている学生ボラ

ンティアも更なる必要性が求められているし、支援内容もただ単に日本語を教えればよいという段階では留まっていないのが実情でした。また、サポートをする各小中学校側の先生方に於いても外国につながる児童生徒への更なる支援・理解を深めていきたいという思いが伝わってくるものでした。そして、3部の高校進学ガイダンスについての意見交換会においては、HANDS プロジェクトが主催をしているけれども、行政や各地域の教育委員会の協力を得なければ実現できるものではないことがよく分かりました。今年4地域で開催することができたという背景には、そのニーズ及び各行政の理解・協力があってのことだと理解できました。

外国につながる子どもたちは現在何を必要としているのでしょうか。もちろん広範囲で単純に述べてしまえば、政府が国民の意識度、学校生活面及び言語面等で更なる支援をする必要があるということなのかもしれませんが、それはまだまだ困難なことかもしれません。それでは、今、彼らに何ができ、彼らの未来には何が待ち受けているのでしょうか。まず何よりも、個々の周囲、学校そして地域レベルでの彼らに対する意識・理解度を増加させていく必要があるでしょう。1部の体験談の中でも述べられたように「自分を理解してくれる人がいた」ということは当然なことかもしれないが、外国籍ということによってそのような人と出会うのは困難であるケースが多いと感じます。そのため、外国につながる子どもに対する壁を壊し、彼らと本当の意味で繋がっていかねばならないと感じます。彼らの未来はグローバル化する日本社会の未来にとっても非常に大事な問題となるのではないのでしょうか。そのようなことを考えさせられたフォーラムでした。

(国際学部 国際社会学科 3年在学生)

(2012年12月10日原稿受理)

キャリア指南 08 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。第8回目には内山研究室OBの**高橋健太**さんをお願いしました。

「市役所職員として働くこと」

宮城県名取市役所 高橋 健太

国際学部国際社会学科第7期卒業生の高橋健太です。私は大学卒業後、民間企業における勤務を経験したのち転職。2011年4月から地元の市役所にて勤務しています。

そこで、自分がどんな業務に従事してきたか、その経験から市役所の仕事とはどのようなものだと感じているか、という2点について後輩である皆さんにお伝えします。

まず、自分が名取市役所においてどのような業務に従事してきたかについて書きます。名取市とは仙台市の南隣の市で、東側は海に面しています。そのため、特に海岸沿いの区域は2011年3月に発生した東日本大震災によって発生した津波で甚大な被害を受けました。人的被害については人口約7万人のうち約千人が死亡、家屋の被害については約3,800件

が全壊状態という状況です。私が現在の職場で働き始めたのは上記にあるとおり東日本大震災発生の約 3 週間後でした。入庁後、最初に与えられた仕事は生活支援金の給付に関する事務でした。家族が亡くなった人に対して給付される弔慰金、自宅が大規模に損壊した人に給付される生活再建支援金などに関して受付をし、振込の手続きをするという仕事。この仕事に従事して大変さを痛感したのは住民への対応でした。給付金の受給には基準があり、受給できる人がいる一方、受給できない人もいます。その基準に納得できない人に対しては説明をする必要があります。そしてそれらの人が冷静に話をできる状態であればいいのですが、家族を亡くしたり住んでいた家を失ったりとみんな精神的に不安定な状態。そのような人たちへの対応は神経を大いに使うものでした。生活支援金の給付については法律で規定されており、基準に納得できない住民に対してはその法律の趣旨を根気強く説明するしかありません。この業務に 3 ヶ月間従事した後、別の部署に異動になり現在に至るのですが、住民対応の難しさはどの仕事においても共通しており、日々悪戦苦闘しながらよりよい対応ができるよう学んでいます。

以上の経験から私が感じたのは、市役所の仕事とは住民との距離が近いものであるということです。国や県の機関で働く職員と違い、市民にとって一番身近なのが市町村の職員。そのため、良い仕事をすれば住民に対し直に貢献できる一方、好ましくない仕事をするとう住民からの不平に直接さらされます。また、住民との距離が近い分、国や県の公務員と比べると影響を与えることができる範囲は限定的であると言えます。そのため、人と接してサービスするのが好きな人や、地元に対する愛着が強い人が、特に市町村の職員に向いていると思います。

在学生の皆さんが興味を持っている国際的な問題に関し、同様の問題が日本国内において起こっていることは多分にあると思います。「この国際問題は、国内においても問題になっていないか」という意識をもって学び、日本の住民や消費者の心理について考えることが、特に国内で就職をする人にとって有意義なことだと感じます。皆さんの学びの充実が、卒業後の社会での活躍に繋がるよう祈っております。

(2012 年 10 月 5 日原稿受理)

(国際学部 国際社会学科 2005 年 3 月卒業生)

フォーラム 2012 年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。) 今回は博士後期課程在籍中の磯谷研究室 OG の**苗苗**さんとライマン研究室 OB の**バンストーク プレンデン ガブリエル**さんにお願ひしました。

「私の研究」

立命館大学大学院経営学研究科 博士後期課程 **苗苗**

昨年 4 月に、宇都宮大学大学院の国際学研究科を修了し、立命館大学大学院の経営学研究科の博士後期課程に進学してきた。立命館大学の経営学研究科は「戦略・マーケティング

グ系」、「組織・人事系」、「国際経営系」、「会計・ファイナンス系」、「サービス・マネジメント系」、「デザイン・マネジメント系」の6つの研究分野があり、企業経営の展開を視野に先進的で多面的な教育を行っている。そして、研究科は実際的なリサーチ能力と深い思考力を重視し、企業調査、市場リサーチなどのコースが開設されている。

博士前期課程の時、「資生堂のブランド戦略」を研究していたが、化粧品分野は主に技術面いわゆる客観的な品質の良さがブランド価値を支えているため、感覚的な品質の構築を検討する場合もっと相応しい研究対象があるのではないかと考えていた。その時、ブランド分野で激戦しているアパレル産業に注目した。博士後期課程に入学して、私はアパレル産業においてブランド構築における SPA(製造小売業)の役割について研究している。1本目の論文が今年6月に完成し、内容は中国の紳士服ブランドヤンガー(YOUNGOR)の SPA モデルの歴史発展と意義を明らかにする研究である。ヤンガーの「自己完結型 SPA」¹は、従来の SPA モデルより、高品質にこだわり、シャツの原料になる綿花の栽培、生地の生産、加工、縫製などアパレル川上を徹底的に一貫して管理する特徴があり、それは他社との多元的差別性の源泉である。SPA モデルは生産・流通システムを効率化する一方、ブランドを構成する製品・品揃え・販売・コミュニケーションといった個々の要素を有機的に結びつけ、ブランド構築をサポートする。

中国大手アパレル企業雅戈尔集団(ヤンガー・グループ)は自社ブランドを開発し、原料栽培から生地の生産、縫製、市場開拓、小売まで統一的に管理する SPA を採用しており、アパレル事業分野では、2010年に中国のトップ企業になった²。ヤンガーは1979年に寧波市に本社を設置し、紳士服のローカル・ブランドから多様な製品ラインをもつ中国トップ・ブランドを育成し、さらに海外ブランドの買収を通してグローバル・ブランドを目指して成長してきている³。ヤンガーは20年間の努力を通して、商品の開発、技術の革新と高品質への追求、さらに「自己完結型 SPA」ビジネスモデルの確立により、コストを抑え、生産・流通期間を短縮することができるようになる一方、ブランド構築にも重要な一歩を踏み出した。製造・小売分野に入り込むヤンガーは、比較すると日本のアパレル企業より SPA を全体的に広く、深く行っており、SPAの実行性と深化の意味で、典型的な事例として検討される意義がある。

近年ヤンガーの SPA モデルに関する研究が多くなり、先行研究⁴はヤンガーが創立してから2004年までの歴史発展と製販統合 SPA の導入段階を明らかにした。論文は先行研究に検討されていない課題、つまり SPA がヤンガーのブランド構築に与えた意義、いわゆる SPA はどのようにブランドの各要素を結びつけ、ブランドの多元的な差別性を作ったかを解明することを目指している。

今年9月に中国内モンゴルにあるオールドス(ERDOS)というカシミア製品を製造・販売する会社に対して現地調査を行った。複数の中国アパレル企業を取り上げ、SPA とブランド構築との関連性および SPA が中国での発展経緯を明らかにすることを目指して考察を続けたいと思う。

1 本稿に論じている「自己完結型 SPA」は李(2009)を引用した言葉であり、一般的な SPA の上に原料まで自社栽培し、生産、流通、小売機能を全部内部化し、外部委託の形にも依存しない全プログラムを完全に一貫して管理するモデルだと考えている。シャツの場合は、2005 年以降原料になる綿花を自社の基地で栽培し、生地生産から、縫製、販売まですべてが一貫して管理されている。スーツに関しては、2004 年以降原料を外部から調達し、生地生産から販売まで自社内部で行われている。

2 2010 年 3 つの事業を含めて売上高 334.8 億元、利益 48.99 億元、アパレル輸出 1,295 億ドルに達し、売上高は前年比 22.2%増、利益は前年比 17.9%増、輸出は 20.9%増に達し、飛躍的な成長が見られる(雅戈爾集團内部資料「2010 年雅戈爾集團經濟發展白書」、1-3 頁)。

3 ヤンガーホームページ(<http://www.youngor.com/>)2011 年 12 月 14 日。

4 本稿では、主に辻(2004)、李(2010)は、佐野(2005)、加藤(1998)、高垣・城間(2007)、金(2008)、黄(2008)などの先行研究を参照した。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第 11 期修了生)

(2012 年 10 月 14 日原稿受理)

「カナダと売春」

バンストーク ブレンデン ガブリエル

日本では 12 月 16 日が総選挙となり、再び政権交代の結果になる可能性が高いと考えられる。多くの政党のマニフェストの中で憲法の改正が求められているが、それを機に、最近カナダで話題になっている裁判について以下に紹介したい。今回取り上げるのは、「カナダ権利と自由の憲章 (Canadian Charter of Rights and Freedoms)」に出てくる無差別の保証、自由権、安全の確保およびその保証に関わるものである。

売春と売春宿

カナダの法律では売春行為そのものは禁止されていない。しかし、売春宿を経営することや、売春から得たお金で生活すること、公的な場で売春の呼びかけをすることなどは違法である。かつてオンタリオ州で売春婦が「この法律は自由権や安全確保を侵害してしまう」と訴えた。それに対し、政府は売春行為そのものが基本的に違法と成ってしまっている事実を認めながらも、「社会全体の安全を維持するため、その法律が必要である」と反論した。

売春行為が禁止されていることが事実であれば、憲法で保証されている自由権は侵害されてしまうという判断が妥当である。しかしながら、他国と同じように、「カナダ権利と自由の憲章」に出てくる権利には限界がある。憲章の第 1 部で権利及び自由は適切な限りまで保証されている。つまり、重要な必要性があると認められた侵害は憲法違反にはならない。

政府側は、売春についての制限が社会の混乱を防ぐためであり、老若男女が行き交う公

的な場において売春に関わるものを認めてしまうと子どもなどに悪影響を及ぼしてしまうと論じた。一方、原告側はその制限のせいで、売春行為が暴力団につながってしまう危険性を高め、売春行為が違法とみなされてしまうために何か起こっても被害届を容易に出すことができないと主張した。この理由から、売春婦は自分たちの身を守ることができるように、売春に関する法律を取り下げるよう求めた。

長期に渡る裁判の結果、裁判所が次のような判決を下した。

- ・売春行為そのものが必ずしも社会に相応しくないということではない。売春行為によって得たお金で生活できない状態というのが自由権を侵害している（例として、売春婦が自分のお金で秘書や警備員を雇うと、雇用者だけでなく労働者も法律違反になってしまう）。
- ・安全面から考えると、路上での売春が比較的に危なく、売春宿を禁止することによって生じる社会的なメリットはないため、自由権を侵害していることになり、第一部の例外に当てはまらない。
- ・公的な場での呼びかけも自由権を侵害していると判断したが、全体的な社会の和を保つことが重要であり、第一部の下で適切な例外と認められた。

以上の理由によって、裁判所が売春宿と売春から得た収入についての法律を 1 年以内に取り下げることを命じた。今後、この件は最高裁判所まで行く可能性が高く、注目されるだろう。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第 10 期修了生)

(2012 年 12 月 12 日原稿受理)

特別寄稿

「第 2 回ホームカミングデーに参加して」

石原 庸兆

「卒業してからもう十年も経ったのか・・・」というのが今回のホームカミングデーに参加しての最初に感じた気持ちです。平成 14 年 3 月に卒業して、十年が経ったということに驚きを感じたのです。大学祭や各種試験・研修の会場として何度か峰キャンパスを訪れる機会はありませんでしたが、公式に国際学部に戻ってくるのはほぼ卒業以来だと思います。前回の第一回ホームカミングデーは 2010 年に行われましたが、その時はどうしても所用で参加できず、残念な思いをしました。それ以来、次の機会にはなんとしても参加しよう、と長い間心待ちにしておりましたが、やっとそれが叶ってうれしく思います。

久しぶりに懐かしい 1121 教室に入りました。自分の学位授与式も確かここで行われたと思います。学位記や教員免状を受け取ったあの日のことがずっと昔のことようにも、またつい先日のことのようにも思われます。あっという間の四年間を思い起こして大変感慨深く、またこの峰キャンパスで学ぶことができなくなり、去らねばならないことを名残惜しく思ったものです。

北島元学部長、岡田前学部長と修了生の方々の発表を聞いて、皆さんも同様の思い入れを持って学び、巣立って行かれたのだと痛感しました。各サークルの発表を見て、現役学生の活躍を大いに頼もしいと思いました。皆さん方向性を持って活動しているのだと感心した次第です。懐かしい先生方や、先輩・後輩と時間を共に過ごすうちに、色々なことが思い出されました。

もう14年も前になりますが、平成十年の春に掲示板に自分の受験番号を見つけた時のこと、オリエンテーションの後、どんな授業をとろうかと考えて迷いつつも高揚を覚えたこと、生協で教科書をそろえた時の感激が次々によみがえりました。思えば、意欲的なカリキュラムでどの講義や演習も生き生きとしており、教官や学生の意識も高く、刺激的な環境で充実した学部四年間を過ごすことができたことを改めて感謝するとともに、このことを誇りに思うものです。今の自分があるのもそのお陰に他なりません。

昨今の日本を囲む環境を鑑みると、必ずしも楽観視できる要因ばかりではなく、若者の「内向き」志向などが問題点として指摘されていると聞きます。宇都宮大学国際学部もその使命を認識し、多様化する問題に取り組むための教育研究拠点として進歩し続けていくことを期待されています。一同窓会員としてその発展に力を尽くす決意を新たにいたしました。

(国際学部 国際文化学科 第2期卒業生)

(2012年12月5日原稿受理)

EU 支部だより

第38号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行することになりました。今回の第6号の内容は、1 イタリアデザイン 守れ “Made in Italy” 2 EU 支部だより “Made in Italy” と異文化についてです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

さて、知求会ニュースも、無事11年目を配信することができました。これまでの原稿執筆の皆様、本当にありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。

編集後記：2010年4月26日から知求会ニュースのバックナンバーは国際学部同窓会 HP (<http://www.afis.jp>) で見られるようになりました。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 chikyukai@yahogroups.jp

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会